

平和をみつめて

吾郷 眞一 (国際平和ミュージアム館長)



2020年の春から新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館を余儀なくされ、秋以降も入場に制限を設ける等の措置をとっており、完全な姿での開館は望めない状況が続いてきました。本年4月からはリニューアルのため、完全に2年半休館します。思ったよりも長い間ミュージアムが閉まり、利用を考えていただいている方々には申し訳なく思っています。私たちとしても通常の活動ができず大変残念ですが、施設の補修を伴う、時期が来たら必ず行わなければならないリニューアルですので仕方ありません。その間は、休館中に始めたWEB展示や、キャンパスの一部を借りての出張展示等で、できるだけ補っていかうと思っています。

「建物の補修を伴う」と書きましたが、それだけであれば、これほどの期間休館することも無いのですが、リニューアルという語が示すように、それは展示内容にも大きな変更を加えるからです。もちろん、現在展示されているものの中で、リニューアル後も引き続きミュージアム内に残るものもかなりあると思います。また、立命館大学国際平和ミュージアムの持つ使命、基本哲学は変わりません。しかし、リニューアルは展示のコンセプトを刷新するもので、従前のミュージアムを知る人にとっては、リニューアル後は全く新しい博物館に足を踏み入れたような気持ちになるかもしれません。そうでなくてはリニューアルをする意味がないでしょう。

私は、館長になってあまり長くないので、前回のリニューアル前のことはもちろん知りません。また、在職期間も短いので、それほどいろいろな経験をしたわけではありませんが、今の姿の国際平和ミュージアムをこれから見ることはできなくなるので、いくつか感想を述べてみたいと思います。

まず、はじめに(まだ館長になる前のことだったのですが)この国際平和ミュージアムに足を踏み入れたときの第一印象は、順路が地階から始まるのはそれとして、次の展示室が2階にあり、1階を素通りするのは不思議だな、そしてその間をつなぐ階段の一段の奥行き(横幅や高さはあまり問題ないのですが、足を踏む箇所)がと

ても狭くて、危険ではないだろうか、という感触でした。(実は、この歩幅の問題は、リニューアルにおける施設改善事項の一つです。)地階と2階が離れている、ということは、物理的距離の問題だけではなく、展示の流れの連続性とも関連します。地階と2階の不連続性については、今までにも多くの意見をいただいています。一昨年、何人かの外国からの国政政治、歴史学者の方々が見学したあとにコメントを求めたときに出た意見も、異口同音に地階と2階部分が内容的にうまくつながっていない、というものでした。私は、必ずしも地階の「平和をみつめて」と2階の「平和をもとめて」に連続性がないとは思わないのですが、それはしかるべき説明があってはじめてつながるのであって、普通にはわかりづらいというのも理解できます。この点もリニューアル後には大きく変わるはずですが。

次に印象深かったのは、団体の、しかも小中高校生の来館が多いということです。平和教育も国際平和ミュージアムにとって大きな使命であるからには、考えてみれば当然のこととはいえ、これは大変勇気づけられることでした。新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館を経て、その後開館してからも団体は受け入れなかったため、少年少女たちの陰が消えて、静かになってしまったのは本当に寂しいものでした。その一方で、大学生、しかも本学の学生(特に他キャンパスの学生)の来館数が伸び悩んでいることを知り、何とかしないといけないとも感じています。たしかに、キャンパスが遠いと来づらいいいことはあります。昨年からのいろいろな試みも行いましたが、なかなか決定打ができません。リニューアルを機に、このことへの対応も抜本的にできたら良いと思っています。

いかなる博物館でもそのようですが、(台北の故宫博物院があまりの所蔵品の多さのために、頻繁に展示品の入れ替えを行っていることは有名ですが)当ミュージアムにも、展示しきれない品々が数多く保管されています。また、その数は年々増えていっています。十数年後の次のリニューアルを待たずに、これを時々入れ替えられるようにする工夫も、今回は取り込んでいこうと思っています。

館長として在職した数年間で一番印象に残ったのは、2020年1月の「ミュージアムだより」でも書きましたが、やはり2018年のノーベル平和賞受賞者のムクウェゲ医師の来館でした。ムクウェゲさんの人となりに強く打たれたと同時に、彼が、当ミュージアムの理念である「戦争の加害者・被害者の両方の視点から見ていく」という発想に共感してくれたことです。こちらから説明する前に、彼がそのことを見抜いて述べてくれたことには大いに勇気づけられました。そして、平和をもとめる人たちは、このことを一番よく知っているのだと思いました。

知らないことばかりの国際平和ミュージアム

立命館大学国際平和ミュージアムのホームページを訪ねると、国際平和ミュージアムの開館は「1992年5月19日」と記されています。私は1990年4月に立命館大学文学部哲学専攻に入学し、京都での下宿生活を始めました。国際平和ミュージアムが開館した1992年、私は大学3年生でした。

しかし、残念ながら、学生時代の国際平和ミュージアムの記憶/思い出はありません。「なぜ、記憶にないのか？」と考えてみると、私にとっては「アカデミア立命21」という施設は、そこに設置されている国際平和ミュージアムよりも、学生を対象とした「セミナーハウス」という認識しかなかったからです。私が学生の頃、1回生の基礎演習の合宿やなんらかの学生の集まりで、京都市内の「宇多野セミナーハウス」や滋賀の「蓬萊セミナーハウス」を利用しました。現在、これら2つのセミナーハウスは存在していませんが、セミナーハウスを利用したその時々イベントは、まさに、「The 大学生生活」、「The 青春」でした。

また、先の2つのセミナーハウスはお世辞にも「きれいな」施設ではなかったので、アカデミア立命21が開館し、セミナーハウスとして設えられた3階と4階を利用した時、新築だったこともあり、「非常に豪華な施設だなあ」と思いました。おそらく、地階の常設展の見学に行ったのでしょうか、残念ながら、その記憶は残っていません。

そして月日は流れ、私は2011年4月より立命館大学産業社会学部に教員として着任しました。その年、スポーツ社会専攻の教員として1回生の基礎演習を担当し、その講義の一環として国際平和ミュージアムの見学をしました。それ以前の見学の記憶がないのですから、その時がほぼ初めての見学と言っていいいくらいで、しかも、初めてボラン

ティアガイドの方々の解説を聞きながら、時間をかけて地階の常設展を見学しました。

そんな私ですが、2017年秋学期より、国際平和ミュージアムの副館長に着任し、第2期リニューアルの事務局長となり、リニューアルの基本理念を検討し、その後の基本計画やその具体化に向けた様々な場面に関わらせていただいております。

第2期リニューアルの基本理念を取りまとめていくなかで、何度も第1期リニューアルや国際平和ミュージアムの歴史を振り返ることがありました。「国際平和ミュージアムって世界で最初の大学立の総合的な平和博物館なんだ」、「国際平和ミュージアムって平和のための京都の戦争展という市民運動との関わりがあるんだ」、「2005年には博物館相当施設に指定されたんだ」などなど、知らないことばかり。

このようなことを告白してしまうと、「こんな副館長さんがリニューアルの事務局長で大丈夫か？」って思われるかもしれません。しかし、今次リニューアルが、これまで当館が築きあげ、拓げてきた平和創造の営みを、さらに多くの方々に知っていただける機会となるよう、また、当館が、多くの人が集い、学び合い、交流することが出来るような場所となるように、微力ながらも尽力いたします。

(国際平和ミュージアム副館長：市井 吉興)



ボランティアガイドコラム

宇治から衣笠まで、京都駅からは、50番のバスで45分、JRバスは少し速いが渋滞もあつたりして約35分、26年間、よく通ったものだと思う。

2020年1月、2件のガイドをして、それからはコロナの自粛生活になってしまった。去年の1月は、「今年は86歳になるのだ。有難いことに歩けるし、話もできる。戦争をくぐったものは、年々減る一方なのだから、今年もできる限り頑張ろう」と意を決するものがあった。だから休館と知って、しばらくは拍子抜けというか、気持ちのやり場がなく、腑抜け状態の自分があった。今までやってきたことは、こんな形で尻切れトンボになってしまうのかと虚しくなった。まあ、コロナもそこそこ2~3か月で収まるのではないかと高をくくっていたが、そんな甘いことではなく、これからどうなっていくのか？見通しが持てない。

1993年5月の末、安齋先生（現名誉館長）が新聞で「平和の語り部になりませんか」と呼びかけられた。それに応募したものが養成講座を受けて、ガイドをしていこうではないかと、平和友の会を結成した。ガイドをするからには知識が必要だと学習会を持ったり、広報を出したり、平和ツアーに行つて見聞を広めたり、様々な取り組みをしてきた。平和のために何らかの力を出したいと思っている仲間だから、いろいろ力が出し合えたのだと思う。

初めは手探りで、やっていたわけだが、だんだんこうしたらよいのではと考えを出し合い、方向も見え、新しい仲間も増えてきているのに、このコロナの流行は本当に残念だ。

私自身、人生の終盤に国際平和ミュージアムに通えたことは本当に有り難いことだった。戦争があったが故の、早かつ

た父の死、母の苦勞を見てきている。でも、私の体験などよりももっともつと大変な、過酷な人生を送った人もいる。

明治からこっち、富国強兵政策で、国民が牽引してきた歴史こそ人間として真摯に考え直さなければならぬと思っている。戦争を語り継ぐことは自国の被害を言うのではなく加害に向き合うことが大切だ。それを、具体化しているこの国際平和ミュージアムは、もっと多くの人の来館も望みたいし平和の拠点としてのこれからであってほしいと願っている。

コロナで、多くの尊い命が奪われた。軍備で細菌を撲滅できない以上人類が希望を持てるのは、広い意味の平和の構築であると思う。もう先が限られているのが見えている者としての切なる願いである。

(ボランティアガイド：布川 庸子)



学生スタッフ 活動記録

2階展示学生スタッフ編

私が初めてナビゲーションをした日から、早3年が経ちました。当時私の拙いナビゲーションを聞いてくれたのは、修学旅行で訪れてくれた小学生でした。真っ直ぐに私を見て、一生懸命メモを取ってくれた彼らの姿勢と真剣な眼差しに緊張で声が震えたこと、そして拍手を頂いたときの湧き上がる気持ちは、今でも忘れません。これは、「自分の言葉で後世に歴史を繋いでいく」という仕事の難しさ、責任の大きさを痛感した瞬間でもありました。しかし、他の学生スタッフやボランティアガイドの方々には助けられながら、日々多くの事を学び、考え、伝えるというこの仕事は、私にとって何よりも楽しいものでした。

国際平和ミュージアムは、世界ではじめて大学法人が設立した平和博物館ということもあり、学生の自主性をとても重んじて下さる環境です。「学生スタッフを組織として成り立たせ、さらに多角的な活動をしていきたい！」と突然言い出した私を後押しして下さったミュージアムオフィスの方々、そしてともに頑張ろうと声を上げてくれた学生スタッフの仲間たちには、本当に感謝してもきれません。学部、学年、国籍の多様な学生スタッフだからこそ提供できる価値がここにはあります。それを後に残していく制度を構築できたことは、今後より大きな価値を多方面にもたらすことになると私は信じています。

そして、私は国際平和ミュージアムでの学生スタッフ活動を通して、「どうすれば戦争の歴史の風化を止めることができるのか」という問いへの答えをずっと考えてきました。日本は1945年に戦争

に負けてから、75年もの間、国際協調・平和構築に努めてきた国です。ここに至るまでに、国家だけでなく、国民もまた苦しんできました。平和とは、ただそこにあるものでなく、弛まぬ努力によって勝ち取っていくものです。そして、平和を創るのは国家でも国連でもなく、国民一人一人の反戦への強い思いであると私は考えています。戦争の過去を知り、受けた被害のみならず加害責任にも目を向けて、多角的な視点で平和を考え続けることが、今の日本人に求められていると強く思います。国際平和ミュージアムから広がる学びの輪が、これからも末永く続いていくことを願ってやみません。

(2階展示室学生スタッフ：中上 彩奈)



学生スタッフ 活動記録

メディア資料室学生スタッフ編



瞬く間に、国際平和ミュージアムのメディア資料室の学生スタッフとして働く2年間が過ぎました。この2年間、とても濃い毎日をごさせて頂きました。

メディア資料室での作業は、受付以外では資料の整理と撮影がメインです。資料整理という作業は、一見地味な作業に見えるかもしれませんが、当館に寄贈された資料または展示されていない資料に関わることができる貴重な機会です。私は、大学で法学を勉強していますが、歴史が好きで国際平和ミュージアムの学生スタッフに応募しました。それが故に、こうした資料に自分が携わることができるというのは、感謝の気持ちでいっぱいです。資料に記された絵や文字から歴史の厚みを感じられ、戦争への反省と平和への意味を常に自分の頭の中で考えています。従って、メディア資料室の仕事

は、私にとって単なる作業ではなく、勉強する場ともなりました。これをきっかけに、平和という二文字は、私にとって、言葉の意味に留まらず、新たな意味として私の心の中に刻み込まれました。

私はこのメディア資料室での作業を始める前に、あまり経験がないから、最初はかなり苦労しました。特に私は時々不真面目な面もありますので、作業が進んでいく中で自分が原因でミスしたこともありました。その時これを許してくれたミュージアムオフィスの方々、本当にありがとうございました。メディア資料室の先輩たちや、同じ中国人の学生スタッフの支えにより、自分が本来苦手の作業でも、できるようになりました。こうした経験を通じて自分を磨くことが出来ました。今の自分に満足せず、これまでの経験を生かして、これからの学業や仕事に全力で頑張りたいと思います。

国際平和ミュージアムは、戦後の日本の平和教育に大きな役割を果たしました。私が最初に国際平和ミュージアムのことを知ることができたのは、中国のニュースで報道された時でした。スタッフ採用の面接で「なぜ応募したのか」と聞かれたときに、「中国でのニュースで報道された大学博物館に、どういう魅力があるのかわかりたかったからです」と答えました。実際、国際平和ミュージアムに入って、展示された慰安婦が連れ去られた写真や、空襲後の様子を見てみると、歴史の真実に近いものがここにあり、ここが伝えようとする歴史を尊敬すべきだと感じました。これからも、国際平和ミュージアムが、日中交流の重要な橋となるように期待します。

(メディア資料室学生スタッフ：李 文強)

当館では、昨年より展示・所蔵している資料の一部を取り上げたWEB展示を開始いたしました。

過去に「国際平和ミュージアムだより」で紹介した資料

や、常設展で展示している資料をWEB展示としてホームページから発信しております。

当館は、2021年4月から2年半のリニューアルのための休館を予定しており、2年半という長期のリニューアル休館中を通しても、国際平和ミュージアムからのメッセージを広く社会に向けて発信する予定です。また今回の取り組みが、リニューアル後のWebコンテンツ開発の一助となることを期待しています。

WEB展示は国際平和ミュージアムのホームページから閲覧することが出来ますので、ぜひ、ご覧ください。

<https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/webexhibition/>



遊心雑記

コロナ、来るな!

安齋 育郎 (国際平和ミュージアム名誉館長)

猛威を振るっている新型コロナウイルスは、英語で“novel corona virus”と言いますが、“new corona virus”という言い方も使われます。言うまでもなく“new”は「新しい」という意味ですが、“novel”は「新種の、新型の」という意味です。“new car”は「新車」、 “novel car”は「新型車」です。いまパンデミックを引き起こしているウイルスはまさに「新種」で、その正体がよく分かっていない不気味さがあります。コロナウイルスには表面に約20ナノメートルの特徴的な突起があり、見た目が王冠 (crown) に似ていることから、ギリシャ語で王冠を意味する“corona” (コロナ) という名前がつけられました。そのような特徴は共通にみられるものの、最近ではその「変異種」がいくつも見つかって、開発されたワクチンの有効性との関係でも、新たな論議を呼んでいます。

新型コロナウイルス感染症は、世界保健機関 (WHO) によってCOVID-19という正式名称が与えられましたが、日常的には“with corona”とか“after corona”のように「コロナ」という単語が広く用いられ

ています。

厄介なことに“corona brain” (コロナ脳) という言葉まで登場しました。新型コロナウイルス感染症に対して神経質になり過ぎたり、過度の不安に陥ったり、パニック状態になったりして、脳が異常な反応を示している状態のことです。

私は放射線防護学が専門ですが、今年10年目を迎える福島原発事故の被災者支援に何十回も福島を訪れている中で、「事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う」という姿勢が大切であることを認識しました。新型コロナウイルス感染症の場合も全く同じだと、このごろ痛切に感じています。今後も十分な情報開示と、明確かつ具体的な対策の提起が行われることを期待します。



わが家のコロナ守護神「コロナベコ」

■ミュージアム概要■ (2021年3月27日 (土) 迄)

開館時間: 10:00~12:00 (入館は11:30まで)
13:00~15:00 (入館は14:30まで)
消毒等の実施のため、12:00~13:00は一旦退館をお願いいたします。
当日の再入館時の見学資料費はいただきません。

休館日: 日曜日及び、祝日の翌日 (日曜日が祝日の場合は開館、翌日が休館)
年度末の大学が定める休館日 (2021年3月28日 (日)~31日 (水))
※詳細はHPでご確認ください。

見学資料費 (入館料): 大人400円、中・高生300円、小学生200円

リニューアル休館のお知らせ

2021年度からリニューアル工事のため、2021年4月1日 (木) ~2023年9月まで休館を予定しています。
リニューアルオープン日程については、詳細が決まり次第、HP等でお知らせいたします。

立命館大学国際平和ミュージアムだより



第28巻 第3号 (通巻83号) 2021年3月15日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL : 075-465-8151 / FAX : 075-465-7899
<https://www.ritsumeikan-wp-museum.jp/>



今後、展示・イベントのご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、国際平和ミュージアム (075-465-7899) へ送信ください。